新しいまちを創る

シリーズ⑦

史跡富田城跡整備事業

富田城主要部を防御する「大土塁（おおどるい）」が出現

市の大型事業について定期的にお知らせしているシリーズ「新しいまちを創る」。今回は、樹木の伐採が進む「富田城跡整備事業」と今年度末の完成に向け整備が進む「安来庁舎周辺工事」について紹介します。

山中御殿を守る「大土塁」が出現

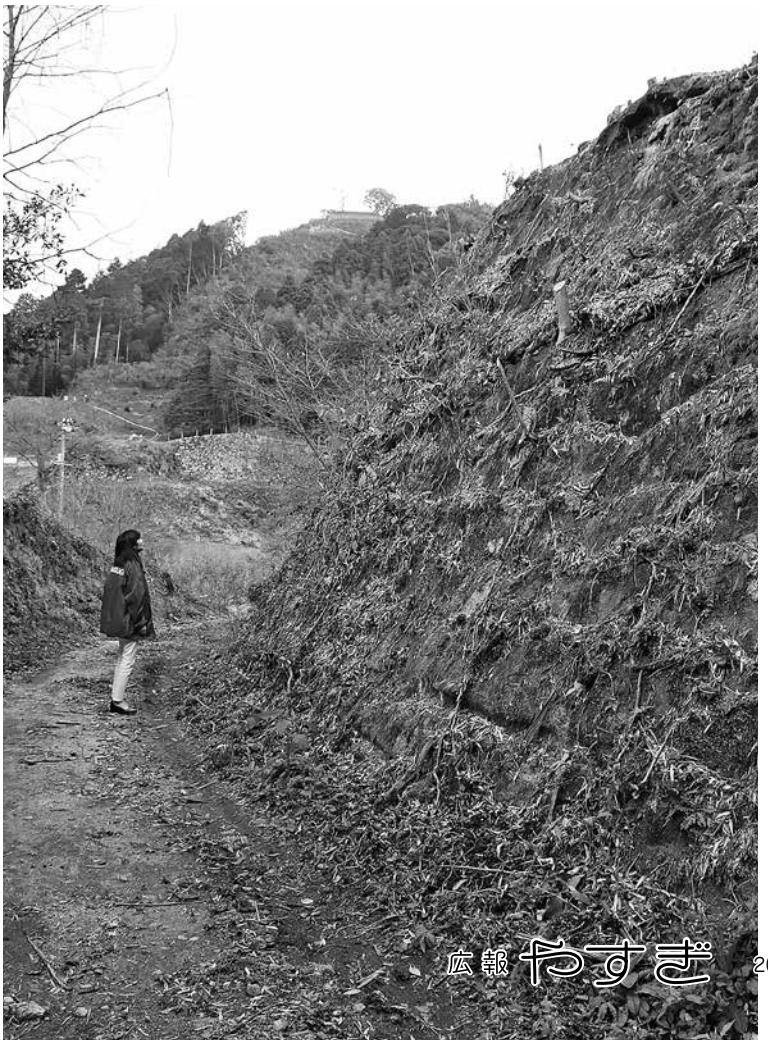
平成27年度から整備を進めている月山富田城跡では昨年、多くのイベントを開催しました。9月には全国山城サミット安来大会と戦国尼子フェスティバル、11月には戦国ロマンウオークなど、多くの皆さんが富田城跡に足を運んでいます。

▲馬乗馬場の石垣の保護の様子。

9月のイベントの直前には、山中御殿につながる大東成（だいとうなり）地区で木々の伐採が行われ「大土塁」が出現しています。長さ約130m、幅は最大約20m、高さは約5mにもなる富田城最大の土塁です。後世に造られた作業道によって中央で寸断されているため、その大土塁の高さを実感することができます。

土塁とは、敵の侵入を防ぐ土砂でできた壁のこと。富田城の中枢である山中御殿を守るための防御施設と考えられます。等高線を見ると、両側に谷が迫った緩やかな丘陵上（標高は約75m）に築かれ、守りの要として重要視されていたことが伺えます。

発掘調査や専門家の調査が行われていないため、詳しいこと



◀大東成地区の大土塁の高さは5m以上にもなります。切り通しは後世に造られたもの。奥には、富田城の主要部である山中御殿の石垣、その向こうには山頂三の丸の石垣が見えます。

◀山中御殿方面から見た大土塁。全長は約130 m、幅は最大20 mになります。内側（山頂側）に比べ、外側（ふもと側）がより高く築かれており、外部からの進入を意識した造りになっています。1 km四方にもおよぶ富田城跡・城砦跡群の中でも最大の規模を誇る土塁です。

は不明です。しかし、石垣を使った築城技術が発達する前は、土塁が一般的に築かれていたことを考えると、尼子時代のものとも考えられます。なぜ、ここに築かれ、どのように守っていたのか、今後の研究が期待されます。

富田城跡整備事業では今後、山中御殿の塩谷口付近樹木の伐採を進めます。これによって山中御殿東側の高さ約8mの石垣や虎口（出入り口）の様子が分かるようになります。

安来庁舎周辺工事

安来庁舎への出入りが3方向になります

現在、安来庁舎の南側では市民広場の工事を進めています。約0．4haの土地に防災研修棟と広場を整備します。震災時の一時的な避難場所となるこの施設は、3月に完成予定です。

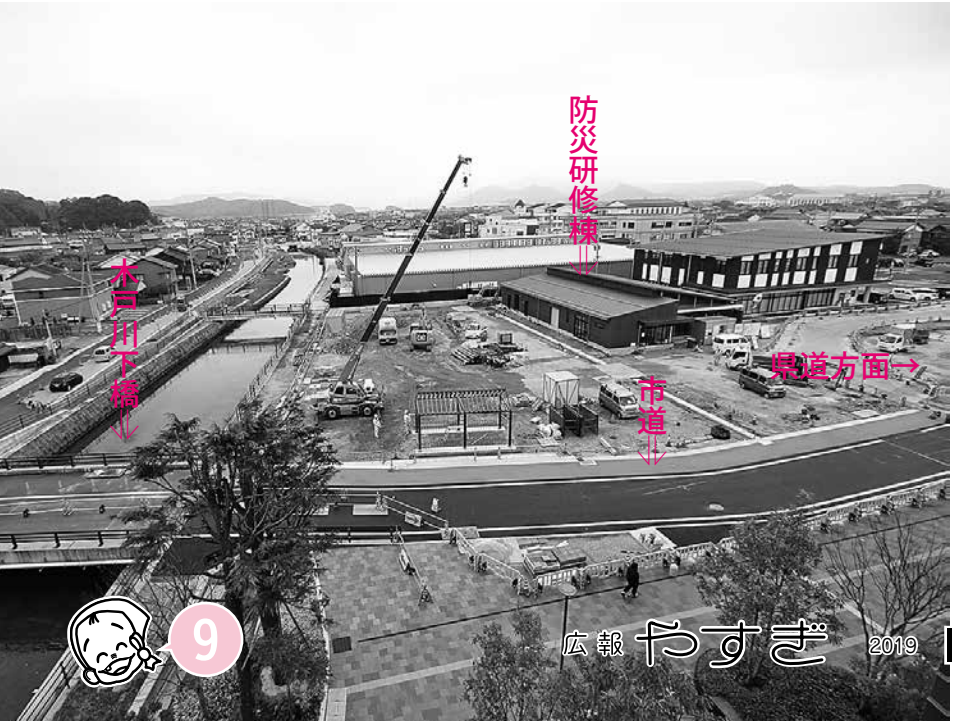
市民広場と安来庁舎の間では、市道の整備を進めています。この市道は、県道から木戸川に架けられた木戸川下橋につながります。県道との接続部は、安来庁舎へのスムーズな出入りができるよう幅を広げています。一方、安来庁舎から県道へ出る場合は、右折・左折専用帯を設けているので、以前に比べ安全性が向上しています。

歩道部分はカラー舗装で十分な幅を確保。人と車両とが安全に通行できるよう配慮しています。

新たな市道は、県道から安来庁舎までの区間を12月から通行できるようになりました。、また、木戸川下橋は今春には車両の通行が可能となる予定です。

◀木戸川下橋から県道方面。右が安来庁舎、左が市民広場。普段は公園として利用し、震災時には一時的な避難場所になります。

これによって、安来庁舎へは①国道9号②県道③木戸川下橋の3方向からの出入りが可能になります。



◀安来庁舎から南側の市民広場および新しい市道を望む。中央部分の平屋建物が防災研修棟。このほか、防災パーゴラ（普段は日陰棚で有事には仮設倉庫等に利用）やマンホールトイレなどを整備します。左下は木戸川に架かる木戸川下橋。